

## 子ども主体で元気な学校づくりを進めましょう

西部教育事務所 管理主監 平林 茂

平成25年度もまとめの時期となりました。特に夏以降は、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、各学校では分析や改善策の実施など様々な取組を工夫していただきました。

西部教育事務所でも年度当初から、「子ども主体の授業づくり」をキーワードに、先生方と一緒に授業力の向上に取り組んできました。

これは、授業をもっと子どもの側から見て、子どもの反応や考えなど、子どもの学びの姿を大切にし、それを支える教師の働きかけや教材を工夫して授業のねらいを達成していこうというものです。

各学校では、主体的に学ぶ子どもを育てようと様々な取組が行われています。

A小学校4年生の長方形の面積を求める算数の授業では、児童が自分で考えた求積方法を、図を使いながら一所懸命説明していました。他の児童が「もっといい方法はないかな?」と話し合ったり、ヒントコーナーを活用して、自力解決をしたりするなど、どの児童も諦めずに課題解決に取り組んでいました。教師はその間、児童の考えを本気で聞き、「理由は?」「どうしたらこうなるの?」「こういうことかな?」などと児童に問いかけながら授業を進めていました。少し難しいけれど、夢中で考えたり説明したりする、児童にとってはけっして楽ではない子ども主体の授業が展開されていました。

また、B中学校では、全校生徒で創り上げる体育祭と道徳の時間や体育の学習を結びつけて、いじめ防止につながる豊かな心づくりや、強い体づくりを進めていました。全校生徒が体育祭の計画づくりや運営に取り組む中で、生徒同士の意見の違いや準備を進める上で困難な点について、知恵を出し合いながら乗り越え、体育祭を成功させました。そして、その一人一人の貴重な体験を生かした自作資料をもとに、各学年で「自他の尊重・寛容」を価値項目と

した道徳の授業で活発に意見交換を行い、多様な個性を認め、それぞれの差異を尊重する心を育てていました。

毎日の授業をはじめとする教育活動が型どおりで心が弾まない退屈なものであると、前向きな意欲もわかず、力も付かないと思います。教師も、子どもが乗ってこない授業では疲れが増すばかりだと思います。子どもや先生方が元気になるためにも、子ども主体の授業や教育活動の充実を一層図っていく必要があると改めて感じました。

学校を取り巻く厳しい状況の中、多くの学校では、校長先生を中心に先生方が一丸となって特色ある教育活動を推進しています。ややもすると課題のみに視点があてられ「あれもできていない」「これもできていない」ということになり、学校や先生方のモチベーションも下がってしまいがちです。

「自校ではこういうことができている」「子どもたちはこんなことができるようになってきている」という学校や子どもの姿に表れた取組のよさや成果をもっと評価し、子どもや先生方が実感できるようにすることが学校づくりを進める活力につながります。例えば、「毎日休まず登校できる」ことの基には健康教育の成果があり、「困っている友だちに声をかけられる子どもが多い」ことは人間関係づくりの力が育っていることの表れであると考えられます。自校で「できて当たり前」ととらえていることが、実は子どもの成長であるとともに学校の強みであり、課題解決を図る上での本質的なものであったりすることもあります。

子どもを様々な教育活動の中心に据え、成長を実感しながら強みをさらに伸ばし、子どもや先生方が生き生きと学べる元気な学校づくりを進めていきましょう。



